
おばちゃんケータイ！！

すずらん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おばちゃんケータイ!!

【Nコード】

N2596E

【作者名】

すずらん

【あらすじ】

祝大学生となった俺は一人暮らしを始めることに！お気楽気ままな一人暮らしと最高のキャンパスライフを夢見る俺。だけど引越すなり不運と怪奇(?)が俺の生活を掻き乱す……ああもう、ちよと黙っててよ、おば——じゃなくて田中さん……はい、今から掃除始めます……

【1】俺 VS ドロボー？

初めてケータイを買ってもらったのは、高校受験が終わった中三の春休みだった。

二代目のケータイは、高校を卒業して東京で一人暮らしを始める前日に買った。

つまり昨日である。

なのに……

今俺の足元には、粉々になった“それ”がある。

『……きな……』

うん……？

『……なさい』

んだよ……

『起きろーっ！！』

「んあ……まだ眠いんだよ……」

母ちゃんの声を遮るように布団の奥に潜った。

まだ大学は始まんねーだから昼まで寝かせてくれよ。

だいたいよ、もうすぐ大学生なんだから母ちゃんに起こされなくても自分で起きれるっつーの。

自分のことぐらい自分でできるっつーの。

言われなくてもやるっつーの。

『……きろ!』

まだ怒鳴ってやがるぜ。

これからは東京で一人暮らしして自立す――

布団からそっと顔半分を出した。

『早よ起きんかい!』

??????

母ちゃん、関西人だったっけ?

声もこんなにしやがれてたか? 母ちゃん声変わったのか?

『何度も何度も言わすな、ボケっ! 早よ起きろや言うとなねん!』

というよりも、ここに母ちゃんがいるわけねーよ!

だって俺、昨日から一人暮らし始めたんだから!

布団をがばっと押しのけ、ベッドの上に立った。

「だだだ、誰だ！」

震えててしかも裏返った俺の叫び——ちよい恥ずかしいが、それどころではない。

まさか引っ越し早々ドロボーに入られるなんて！

こここ、こえーよっ……

『なんだい、なんだいその声は。ったく、これだから最近の若いもんは。いい年こいて何怖がってんのさ』

一体どこにいるんだ！？声は近くから聞こえるのに姿が全くないぞ。

クローゼットの中か？まだ服入れてないから隠れるには持って来いの場所のはずだ。

息を吞んで、そっとベッドから降りた。

何か武器になるものはないか？おっ、布団たたきがある。

「おいっ……いいい、いるのは分かってんだぞ！」

再び裏返ってしまった——は置いというて。

布団たたきを構えたもののクローゼットからは誰も出て来ない。

俺が開けて、中の奴が出ようとしたところでこの布団たたきで——

「……………」

布団たたきって頼りねー！それに中の奴に飛びかかってこられたら俺が危ねー！もし武器持ってたら一巻の終わりだ。

「あの……」

命は大切にしよう！ケガもしたくないし、させたくない。そうさ、俺は平和主義者だ！

平和な解決策は暴力じゃなくて、話し合いだ。

「俺、今からトイレにこもるんで、その間に逃げて下さい」

そう、これこそ平和的解決だ。

俺がトイレにいる間にドロボーが出ていけば、俺に顔とか見られる心配もないし、楽に逃げられる。俺が逃げるんじゃないって、ドロボーを逃がしてやるのさ。

お互いケガもしないし、騒ぎも起こさずに済む。

「警察にも電話しないんで、安心して逃げて下さい。お互い何もなかったらことにしましょう」

ドロボーからの返事はないが、構わずトイレへの歩を進める。

「あつ、なので何も盗らないでくれますか？」

トイレの扉を閉める前にこれだけは言わなきゃと思った。だって何か盗られたら俺だけ損だし。

『……ほか』

「えっ、何ですか？俺もうトイレにいるんで出ちゃっても大丈夫ですよ」

『アホかっ!!』

「ぎゃーっ!ごめんなさい!」

叫んだのと同時に俺は何故か土下座をしたまま固まっている。

どこからともなく聞こえたドロボーさんの怒鳴り声。それはしばらくして呆れているようなため息に変わった。

『アンタそれでも男かい?こんなんじゃ先が思いやられるよ。悪いことは言わないから、とっとと実家に帰んな。アンタに一人暮らしは向いてないよ』

……何か俺、見ず知らずのドロボーさんに心配されてる?

『あーあ、土下座なんかして情けないね』

何か悲しくなってきた。

親元を離れて自由気ままにキャンパスライフを楽しもうと思つたのに……引越し時にケータイが壊れ、一人暮らし最初の朝にドロボーに入られ、挙げ句の果てにそのドロボーに土下座して、お説教されて、呆れられて……

きっと今ドロボーのおばさんは俺の前に腕を組んで仁王立ちして、俺のことを見下ろしてるんだろうな……

おばさんドロボーに見下されて土下座している新大学生か……笑えるな。

『だいたいさっきからあんた何を言ってんだい。逃げて下さいだと

か警察は呼ばないとかさ』

え？それはドロボーさんのことを思ってたことだったんすけど……

そう言えば正面に人の気配を感じない。確かに声はするけど……

恐る恐る頭を上げてみると——誰もいない。

「あれ？」

『何があれ？なんさ。人の話ちゃんと聞いてんのかい？』

何故？声はするのに？

「……あの、ドロボーさん、どこにいらっしゃるのですか？」

『はあ？アンタどこに目付けてんのさ。ずっーとここにいるじゃないか』

こっちが“はあ？”だ。ここってどこだよ。見えないから聞いたんじゃないかよ——見えないから……

「ひいっおとおおば、おば、おば——」

『誰がおばちゃんやねん！』

「お化けーっ！！」

何てことだ……

初日からドロボーに入られたって思ってたなら、まさかお化けだっ

たなんて……

訳あり物件だなんて聞いてないぞ！

あ、もしかして俺取り憑かれたんじゃない……

どうすればいいんだ？ 引っ越しか？ 御祓いか？

でも今すぐできることつつたら――

「南無阿弥陀ぶ――」

『はあ？ いきなり叫んだと思えば今度はお経だ？ アンタ病院行った方がいいんじゃないか？』

俺の視界が声の主を捉えた。

「……………」

『おいおい、聞いてっか？――何じっと見てきてんのさ。アタシの顔に何か付いてんのかい？』

「……………」

『黙ってないで何か言いな！』

……有り得ない。

「ウソだ。きっとこれは夢だ。そう、これは悪夢なんだ」

『まーた訳分かんないこと言い出すな』

「訳分かんないのはお前の方だ！」

俺はビシッと指差した。

『あんた人に指差したらあかんやろが！』

「人じゃないだろ！！」

夢だと分かれば怖いものなしだ！

「お前はただの——ケータイだ！」

【2】俺 IN ケータイショップ

テレビでよく見る探偵が犯人に指を突き付けたシーンみたいで爽快だ。

「そう、お前はドロボーじゃない。ケータイなんだ!!」

変な夢だとは思ったけど、俺が探偵になる結末だったとはな。途中までは悪夢に思えたけど、ものは考えようだ。

探偵になる夢なんてそうそうないぞ。犯人役がケータイっていうのはナンセンスだけどな。

犯人を突き止めた後は、犯人が動機を話して、刑事に連れてかれて……夢だからそのうちひよっこり刑事は現れるだろう。

最後はカッコ良く俺のキザな言葉で締めて、エンディングだー!

『ああそうさ。あたしはケータイだ。だから何だ!』

ひいー!ケータイが逆切れした。

何でだよ?これ一応俺の夢だろ?主に優位な夢になれよ!

「イデーッ!!」

いてー!後ずさりしよーとしたらベッドの脚に足の小指ぶつけちゃった。

……ん?夢って痛いっけ?

試しにわざとベッドを蹴った――

「イ、イテーツ!!」

『んなことしたら痛いの当たり前だろが!』

ダメージを受けた足を抱えながら床で転げ回っている俺にケータイからツツコミが出た。

「これ、もしかして夢じゃなくて現実!?!」

ここでまたケータイからツツコミが来るかと思えば、黒電話っぽい着信音が鳴りだした。

サブ画面に表れた“家”の文字。

「あつ、もしもし母ちゃん?」

反射的にいつものようにケータイを取って、通話ボタンを押して耳に当てる。

《健二、どう? 一人暮らしは?》

「へーきだよ。問題なし。あ、でも昨日ケータイ壊れちゃって――」

《え? ちょっと何やってるのよ。新しくしたばかりだったのに。ホント……世話のかかる子だね》

「いつまでも子供扱いするなよ!。今日だってこうして一人で早起きしてるんだぜ」

《ええ、電話に出るのが早かったのには驚いたわ。でも携帯壊した方が驚いたわ》

「壊したんじゃないくて、壊れちゃったんだよ。でもちゃんと自分で店に行って新しくしたぜ」

《はいはい、壊れちゃったのね。あと他に困ったこととかはない？》

「ないよ。変な夢は見たけど寝心地は良かったし、荷物の整理も今日中に終わりそうだし」

《そう、ならいいわ。何かあったら必ず電話しなさいよ》

「分かってるって。じゃあね、もう切るよ。今から朝飯作るんだから」

ケータイを閉じてベッド横に置いた。

「なんだやっぱ夢か。そうだよな、今普通に電話できてたし。俺もしかしたら引っ越しで疲れてだけかもしれないな」

おーっし！目も頭も冴えてきたぞ！朝飯食うか！

……って、食べ物何もねー。

そりゃそうだよな。昨日は昼も夜もコンビニ弁当だったし、買い出しは今日行くつもりだったもんな。

「しゃーねえ、とりあえずまたコンビニ弁当食うか」

『さっき作るって言ってなかったか？』

「材料もなしに作れるわけねーだろ」

……………。

「はっ！？俺、今誰と話したんだ？」

『あたしに決まってるだろ』

待て待て待て！ケータイがおばちゃん口調で喋ってたのは夢だろ？
今は現実だぜ？

空耳だ、空耳。

『一人で起きたって自慢してたけど、あたしが起こしてやったじゃないか——って何すんだい！』

俺はケータイをガバツと掴んで振り回した。

「あははは、このケータイ壊れてやがる。勝手にどっかのおばちゃんに電話かけちまってるんだな。うん、そういうことなんだ！」

『止めろ！止めろ！アンタ、女と精密機械は丁重に扱いな！！』

「どこのどなたか存じませんが間違い電話です！さよなら！」

『あっ！』

ぷつりと電源を切ると部屋には俺の息づかいだけが響いた。

「ふう……………」

間違い電話なのにあのおばちゃんよく喋ってたな。朝っぱらから暇だったんだろうな。きつと独り身で寂しかったんだろうな。想像力が豊かで微かな音でも俺の動きが分かったんだろうな。

もう電源入れても大丈夫だろ。
ぼちっとな――

『ちよつとアンタ!』

――もう一度ぼちっとな。

『……………』

よしよし。コンビニで朝飯を買って、食べ終わったらケータイシヨップに行こう。

ケータイシヨップに入るなり店員のお姉さんと目が合った。

「今日はどうなさいました?」

俺はひとまず苦笑いしながら、お姉さんが勧めるイスに座った。

「新しい携帯電話に何か不具合がありましたか?」

このお姉さんは昨日も俺の対応をしてくれた。
粉々になったケータイの破片を集めてビニール袋に入れて持って
きた俺はお姉さんの記憶に深く刻まれたことだろう。

「いやあ、実は昨日新しくしてもらったケータイなんですが……」

ポケットからケータイを取り出して机の上に出した。

お姉さんの顔に疑問符が浮かぶ。あれ？破損してないじゃん！と
でも言いたそうだ。

「声が聞こえるんですよ」

「はい？」

「しかも俺と会話するんです」

お姉さんの可愛い顔が一瞬にして引きつる。

「あの……携帯“電話”なのでそれは当然のことなんですけど」

「いや、違うんです。今朝なんてこれに起こされたんですよ」

「それはアラーム機能では？」

「違います。それに声や口調がまるで大阪のおばちゃん——」

「店長ーっ！」

ありゃ……お姉さんが店長さん呼びに行っちゃったよ。

俺何か変なこと言った？変なのはお宅で買ったケータイなんですか。

「お客様、破損や故障がないのでご使用に問題はないと思われるのですが」

ひえー、なんて体格のいいマッチョな店長さんなんですか！

でも俺、店長さんが怖そうだからって引かないぜ！ちゃんとしたケータイに換えてもらうんだ！

【3】俺 BUY レトルト

『アンタ、スーパーに買い出しに行くんだろ。ほら、もうすぐタイムサービス始まるじゃないか。とっとと行きな。夕飯ぐらいは作——』

「誰のせいだ！」

ダンボールだらけの部屋でケータイに向かって怒鳴る俺。

『あたしが一体何したってのさ！』

「喋らなかった！」

『何言ってるんだよ。こうして喋ってるじゃないか』

「ケータイショップでだよ！」

ケータイに向かって叫んだ後、枕に顔をうずめた。昼間のことが頭の中で回想される……

ケータイショップの店長さんに店の奥の部屋に連れてかれて……
ありのままにケータイのことを話して……
店長さんが確かめるっていうからケータイの電源入れて渡して……
んで、店長さんがケータイに話しかけて……
ケータイはうんともすんともしなくて……

俺は追い出された。

そして家に帰るなりケータイからまたおばちゃんの声と笑い声が部屋に響いたんだ。

『アンタ、絶対あの店のブラックリストに載ったね』

何で店長さんの前で喋らないんだよ！

「ケータイならケータイらしく黙ってる！」

『はあ！？何だいアンタのその口の聞き方は！？』

「アンタ、アンタって呼ぶな！俺には伊藤健二って名前があるんだ！」

『そうかい、そうかい。名前で呼んで欲しかったんなら最初からそう言いな。あたしの名前かい？あたしは田中藤子ってんだよ』

「名前なんか聞いてねーよ……って名前あるのかよ！？」

『失礼なこと言うんじゃないよ、当たり前だろ』

当たり前じゃねーよ！ケータイが喋ってる時点でおかしいよ！なのに名前（しかも普通な）があるし！

「えっと、田中……さんは……」

『何だよ、男ならはつきり言いな』

「田中さんは一体何者？」

『携帯電話だろ』

「そうだけど、そうじゃなくて」

『……まあ、一種のお化けとも言えるかもな』

お化け……ケータイに取り憑いてるってことか？

急に田中さんのテンションが下がって重たい空気が部屋に流れる。

『あたしのことが怖くなったかい？』

怖い？初めドロボーだと思った時は怖かったな。

ケータイだって気づかなくてお化けって騒いだ時も怖かった。

だけどうして会話して、当人(?)からお化けだって申告されてみると……

「いや、別に」

『そうか……ところで、そろそろ充電してくれ』

田中さんに言われてケータイを開いて電池サインを確認。後一個だ。

そういえば、昨日ケータイショップから持ってきてから充電しなかった。

コンセントに充電器を繋げて、台座にケータイをセットする。

『あー、生き返る。あたしはアンタに呪いをかけたり、生気を奪ったりやしないから安心しな。ただこうして充電は切らさないようにしてくれよ』

「充電切れたらどうなるんだ？」

『さあね』

「……俺スーパー行ってくる」

『あたしが一緒に付いてかなくて大丈夫かい？』

「一人でスーパーぐらい行ける！」

ボタンとドアを閉めて鍵をかけてチャリで近所のスーパーに向かった。

一人で行けるに決まってるだろーが！ケータイが一緒だろうと何が違うんだってーの！

「ただいま」

『よう、帰ったか』

……って、何俺当たり前のようにただいまって言っちゃったんだよ。

田中さんもフツーに答えてるし。

『あら、アンタ何買ってきてんのさ。スーパー行ってレトルトやら冷凍食品ばっか買ったんかい!？』

「悪いかよ。俺にできる料理はこんなもんだよ」

『カッコ悪いことで自慢するんじゃないよ。明日はあたしも一緒にスーパー行くからな』

「た、田中さんが一緒だろうとなかろうと同じだろ?」

『つべこべ言うんじゃないよ。あたしが買い物の仕方から料理まで教えてやるよ!』

ケータイに買い物から料理まで教わるって……
まるで小姑が嫁を教育するみたいなものじゃないか。

『おっ、アンタのシャツのボタン取れかかってるじゃん』

確かに三番目のボタンが取れそうだ。ん?まさか……

『ボタンの付け方も教えてやりよ』

やっぱり。

それよりもずっと気になってたことが一つ。

「どっから見てんだ？」

『あたしには何でも見えんだよ。おっ、充電も終わったみたいだ。外しとくれ』

ケータイに指図されながらも素直に従ってしまう俺。

この後、ダンボールの中から裁縫道具を探し出して、田中さんの指導の下ボタンを付けたのは言うまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2596e/>

おばちゃんケータイ！！

2010年10月12日05時13分発行